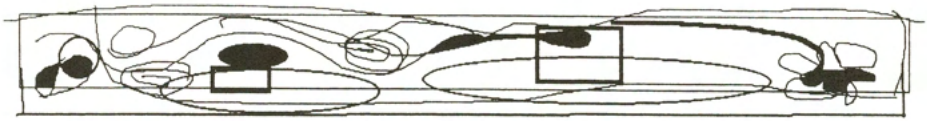
村野次郎創刊

香蘭

2022年（令和４年）８月号

第 99 巻　　第８号　　通巻 1100 号

二〇二二年（令和四年）八月一日発行（毎月一回一日発行）　香蘭　第九十九巻第八号



香　　蘭

2022年（令和４年）８月号
第99巻　第８号　通巻1100号

目　　次

村野次郎作品　私の愛誦歌（84）……渡辺礼比子……表二
近詠十五首　山はみどりに……岡野甫江……2
作品
一……4
二……23
三……30
推薦香蘭集……38
香蘭集……39
作品一特選（六月号）……相川・石井・伊藤（美）・岡野・川原・白井・鈴木（桂）・坪・西野・本田・宮原……16
作品二、三特選（六月号）……大島・小原・庄司・高田・藤本・三浦・山下・今井・小野・川久保・澤田・手島・三神……18
村野次郎への旅（148）……千々和久幸……20
一頁公論（15）連句――抗い難きその魅力――……松田恭子……22
エッセイ・自由研究　六十三年前の「香蘭」……城富貴美……42
焦点（六月号）　仕事を詠う……田中あさひ……46
七首抄（六月号）……市川・小林（ま）・原（卜）・柏原（貞）……48
飯島智恵子「第二歌集を出す」評（六月号近詠十五首）……川原優子……49
作品評（六月号）　作品一……岩田明美……50
作品二……満木好美……52
作品三……藤本佐知子……54
香蘭集……中村陽子……56
緑地帯……三神・菊地・古澤……58
耳言あれこれ（9）……田中あさひ……61
明宝研究会第一二八回五月例会　山上憶良作品研究――人間の根源を見つめた歌人……渡辺礼比子……62
他誌拝見（122）……髙畠憲子……70
歌会及び会合・会員消息・他……72
編集後記・新宿日記……76・表三
表紙絵……中村陽子「浮遊」　目次・緑地帯カット……和田和雄

村野次郎作品　私の愛誦歌（84）

夏ちかき街の夕べの風あかり
こころすがしく髪かりてかへる

『樗風集』

渡辺　礼比子

昭和五年の作。街といっても、高いビルの密集する現代の東京と比べれば、まだまだ閑かな雰囲気であったことだろう。本格的な暑さがくる前の、心地よい梅雨晴れの夕べ、外出して一仕事終えた帰り、人によってはビールを一杯ひっかけてというところだろうが、下戸である作者は、ふと床屋に寄る気になって気分転換を図ったのではないだろうか。

ここでいう「風あかり」は「若葉あかり」「夕あかり」などとともに、『樗風集』の中ではたびたび目にする先生好みの表現である。初夏の長い夕べのほっとした気分の中を、微かな風が吹いてきて、新緑の並木の影を揺らしている爽やかな景が想像される。

初句から結句までどこにも力が入っていない三句切れの歌。読者の心をも、自ずから浄化してくれるような清潔感漂う一首である。

（短歌新聞社文庫『樗風集』87頁。『村野次郎三百首』には掲載されていない）

四選者の作品

敵基地攻撃能力　　平塚　千々和　久幸

「ロシアより愛をこめて」踏み躙るプーチンもラスプーチンに似てクソ坊主
戦いは頬杖ついて見るが良し同じ画像が巻き戻されて
「人間の命は地球より重い」箍の緩みし世に流布せしが
イチ抜けの気分に今日の終わりたる旅上のきみより連絡あらず
ガンバッテ生きていかほどのことやあるいつかの蜘蛛が軒に巣を張る
修復はもはや叶わぬ遅すぎた詫び状を月下に投函したり
不条理と不合理「攻撃能力」と「反撃能力」ほどの差なるか
火の国の灯籠祭りを病む前の妻と見たるは二十年前

合歓の木　　我孫子　丸山　三枝子

眠らんとベランダの窓を閉めるとき蛙の声のあまたひびける
ほんとうに蛙の声か耳鳴りか今宵も思う　梅雨入り間近
むらきもの〈心が喜ぶ〉とうメール岩田さんより届くゆうぐれ
ああ皐月　角の庄やの看板の〈酒と苦楽は一生の道づれ〉
にぎやかに馴染みの店で酌み交わす我ら誰もが故人か知れず
籠原行きの車窓に見ゆる滝野川小学校の校舎もうすぐ
歌会は仲本小学校のうら　運動会の歓声を背に
合歓の木は花をつけたりふわふわの眠りを眠るいくつもの花

待ちてゐき　　東京　桜井　京子

眠い眠いあと百年も眠らんか春の日なかの百年の春
部屋すみに妖しきノイズをたててゐる季節はづれの加湿器がある
窓の辺に置かれてすずしき風信子うすむらさきの風をよびをり
陸橋を上がつては降りてにんげんはさびしいのだらう駅へ向かひぬ
もう来ないバスとは知らずに待ちてゐき十六時半は永久に来ぬバス
コロナでも締め切りは待つてくれぬゆゑ灯りを点けて選歌にかかる
三十分以内のお届け宅配のピザが届いて食はむとぞする
何を見に来たのだつたか荒川のほとりに青鷺たちつくしをり

雲丹食めば　　横浜　渡辺　礼比子

愛しきやし　このはつ夏も梢よりはらはら降れるえごの花浴む
車椅子の母は「しらない」とそっぽ向く拗ねるか将や忘れたるにか
花の水替えるも難儀と嘆きたる母の言葉が身に沁む今日は
山盛りの薬手渡す薬剤師　春はしかたがないですよね
ひさびさの友との電話もおたがいの病気自慢となりて終わりつ
雲丹食めばこども思ほゆ　異国にてトムヤンクンなど啜りていんか
あくる朝戦車に人を殺めんか夜霧のかなたに消えしますらお
自販機のコーヒーの香の疎ましも救急待合に夫を待ちつつ

作品一特選

（六月号作品から）　　桜井京子選

急に春めく　　川越　相川公子

わが墓参よろこぶごとく妹の眠る寺苑のこぶし満開
東京への転勤決まるといふ電話　息子からきて急に春めく
連日の戦禍報ずるトップ記事　戦死の父をまた思ふなり
節分草群生地への路なると紅梅を見て思ひ出したり
東京と空の青さの違ふことふじみ野すぎしあたりで気付く

・二首目、この春一番のトピックス、心のはずむ春である。

今日の歌舞伎座　　習志野　石井雅子

幕間（まくあひ）に弁当使ふこともなく声掛けもなく今日の歌舞伎座
休憩になれば係が楯のやうに会話禁止のパネルで囲む
花粉症コロナに地震の三月にロシアがウクライナに侵攻したるかくれんぼうのままに日暮れて残さるる置いてけぼりわたしであるか
アマゾンに注文の本『本心』は八月購入済みとコメントのくる

・四首目、主意は下句の底深い寂寥感にある。

信濃の家　　東京　伊藤美恵子

癌いくつ身に持つ夫が夕べ来て階下に食器を並べる音す
夫はほとけに近づきたるやあたたかに豊かにわれのかたえにありぬ
玄関へ続くなだりに野萱草咲くころ死にたし信濃の家に
処分すと括りし本の幾くくり無抵抗主義者ら座れるごとし
沖縄へ帰ってしまった島袋さん生きてる人にもわれは去られて

・四首目、本を無抵抗主義者に見立てた知的センスと感覚の冴え。

いぬふぐり　　尾道　岡野甫江

密をさけ群るるを嫌ひて三年（みとせ）なり黄の花群るる三椏咲き初む
鵙（もず）猛る地球は惑へる星なるか疫病はびこり戦はじまる
越境し歓迎さるるは筍ぞ侵攻やまぬロシアの蹂躙
いぬふぐり群れ咲くあたり日の射して見つめられをり「元気ですか」と
三枚に卸しし鯛に塩をふるいつしかに舞ふよ春の風花

・三首目、ロシアの侵攻は災難だが、筍なら嬉しい。

われのムードは　　川越　川原優子

冷蔵庫に卵十個を並べいる週の始めのルーチンとして
ぽってりと淡き色した壺を差しわれのムードと言われ嬉しも
わがムードと言われし壺の柔らかな色合いを見るその絵葉書を
嫌われることを恐れて口籠もるここで言えない私でいいのか
テーブルに本やノートを広げしがとり散らかして歌まだ出来ず

・四首目、闘うべき時は闘うべし。短歌は自己省察の文芸でもある。

交差点　　川崎　白井絹子

交差点に待たされながらそれぞれに行き交う車の行方おもえり
通院の帰りをバスに揺られおり淡き半月窓に見ながら
通院の帰りのバスを追うように付いて来るなり淡き半月
赤信号に停まれば止まる淡き月吹かれそうなり春一番に
赤信号に並んで停まるワゴン車は小鳥のような園児を運ぶ

・車中で見掛けた嘱目を角度を変えて切り取って新鮮である。

ゆきやなぎの花　　西宮　鈴木桂子

ウイルスに出くはさぬやうスーパーへ閉まる頃行く星空見上げ
川に沿ふ歩道うづめて雪降らぬこの地に白くゆきやなぎの花
娘とふたりウラジーミル・プーチンを罵りあひて締めくくる今日
もう帰れないかも知れぬトウキャウへ続く線路が闇にのびゆく
右手首折りて知りたる左手にできるは水道の水出すくらゐ

・四首目、「トウキャウ」への帰還が待たれているが、今は遠いか。

転がる　　東京　坪裕

荘厳な音を響かせ落ちたのか椿は椿のままに転がる
みな同じ扉を持ちつつ西陽浴び個々の暮らしを持てるマンション
友垣のたよりも途絶え春寒しふる里は今も雪と暮せり
大樹にはなれなかったけどこれからもお前と二人で生きるほかなし
何もかも知ってるような顔をして付いて来るなり春近き空

・微かな哀感をウイットに包み、暮らしを古里を連れ合いを思う。

経年劣化　　東京　西野美智代

駅前の再開発とて次々に破壊されゆく戦地さながら
人心の癒されたいに付け入りて犬猫主役の番組ふえる
これはもう経年劣化で寿命です　われのことかとガス屋に返す
朝ドラの刀自なる台詞が呼び戻す白足袋の祖母割烹着の母
黄と青のマスクを付けて現れるプーチンの友の腰巾着が

・五首目、プーチンの盟友は安倍元首相、何と変わり身の早いこと。

雪降らぬまま　　長崎　本田民子

積むほどの雪降らぬままもう弥生明日は黄砂に注意の予報
両隣空き家となりて久しかり残るはわが家と佐藤薬局
断水に活躍したる大甕が空き家から今日戸外に出さる
うつむきて緋寒桜が咲いている早すぎかしらと頬を染めつつ
ばあちゃんはバアサンの転と広辞苑尤もなれど面白く無し

・五首目、真偽の程はともかくアイロニカルな可笑しみを買いたい。

洞ふかき　　倉敷　宮原迪恵

先祖よりもらいついだる老梅は洞ふかきまま今年も咲く
プランター並べるベランダに月射せりそこのみ夜の風のかおれる
少し病み少し怠けて満月の昇るを見れば人の恋しき
キャッチボールの子らの帰れば風冷えて日暮れの路地に白梅におう
わが病めば優しくなれる家族らに甘えて過ごす春の長雨

・何気ない日々の起伏に生きる哀感が刻まれている。

作品二、三特選

（六月号作品から）　香山静子選

〈作品二〉

朝の気持　東京　大島昌子

娘を持たぬ姑と吾とで雛かざり白酒酌みし今日はお節句
考えることにくたびれ開ける窓　早春の雲ゆったりとゆく
大根の千切りの音トントンと朝の気持を前に向かせる
花束を抱えてゆける青年よほんのりバラの香り残して

・人としてのゆとりを感じさせる大らかな作品。

二月の光　鎌倉　小原裕光

地に伏して祈る異人に背を丸め応うるごとき鎌倉大仏
この冬に積もりし朽葉を押し上げて頭もたげる命あるもの
園帽を直すばあばを見上げいる童の顔を春風のゆく
ほっこりと草木瓜花を咲かせいる二月の光を楽しむように

・万物に向ける作者の優しさが滲み出ている。

夜の居酒屋　横浜　庄司健造

春風と喧嘩したとて勝目なし恰好つけてく夜の居酒屋
助走する水面に長く足音を残し川鵜は飛び立ちゆけり
大空に伸びて花咲く白木蓮　藤が丘にも春は来ている
年毎に散歩の歩幅は狭まりぬ恩田川はもさらさらとゆく

・歩幅は狭まっても、まだまだ元気な姿が見える。

旅路　鎌倉　髙田みちゑ

九寨溝をテレビのドローンは撮しゆく見果てぬ夢の外つ国の旅
わが旅路時の移れば九寨溝に心残してフィナーレになる
故里の思ひ出話をする夫の目の輝きをともによろこぶ
死を言ふは老の繰り言されどまた忘れてならじ迫り来るもの

・夫への限りない思い遣りが感じられる。

八十路の坂　常陸太田　藤本佐知子

われはこの八十路の坂をどっこいと越したきものよ短歌詠みつつ
庭隅の椿の蕾が紅を見す何の役にも立たぬがうれし
自がいのちあと三年とも五年とも夫との会話おろそかならず
残りたる未来をふっと思うとき励ましくるる思い出いくつ

・真摯に生きる作者の様子が浮かぶ。

春は明るい　札幌　三浦伶子

温暖化のゆえにかすぐに溶け出せり今年の雪は屋根に積もらず

にこやかに楽し気に話す女子アナよ「今日は一日吹雪くでしょう」
雪降れば心に思う春遠からじ書いても読んでも春は明るい
「もう二度と会えない」を熱唱する老いマイク離さぬディケアの日
・ひたすらに春を待つ北国の人の姿が想像できる。

白木蓮　横浜　山下紘正

裸木は春の光を芽吹かせて遮ることなく地にとどけたり
菜の花が丘一面を包み込み黄色の海の眩しくうねる
次々に純白の花を開花させ白木蓮は天をめざせり
老いらくの恋をしてみむ傷つけるも傷つきもせぬ距離を保ちて
・老いても明るく生きようとする思いが滲み出ている。

〈作品三〉

極楽寺坂　鎌倉　今井富左子

墨色の雲に一面覆われて午後の三時もうす暗い道
弓なりに撓む楓をとまり木にお気に入りかな小鳥の行き交い
いつの間に狭い道まで人の行く雨の路地ぬけ極楽寺坂へ
・古都鎌倉の風情を十分に感じさせる作品。

○　豊後大野　小野香代子

義母とわれ娘と孫と散歩する河津桜の満開の道
連日に映し出される戦禍観てわが親と思い子と思い悲し
チャンネルを変えれば平和な日本ある戦場を忘れ夕飯を食む
・平和な日本に感謝を忘れずに生活する作者の姿が浮かぶ。

今朝は春めく　川口　川久保百子

いつも乗る湘南ラインの八号車一番ドアーが今朝は春めく
どんぐりは拾ってポケットに入れるべしDNAの声が聞こえる
まだ少し寒さの残る今朝なれどマスクの中に春のかおり来
・春の到来を感じて喜ぶ様子が詠われている。

三椏の花　島根　澤田久美子

三月の風は光をはらみつつ今芽吹きたる樹々を撫でゆく
裏山の雑木林も目覚めしか日々あたらしき春の顔見す
・光や樹々に敏感に春を感じ取っている。

ひまわり　福岡　手島洋一

ひまわりの種をポケットに入れよとぞ兵を諭せし女性のありき
この弥生ミサイルの飛ぶ国あれば花の開くを待つ国もある
・戦があっても人は決して花を忘れてはいない。

鳥と戯れ　愛知　三神進

舞い降りし水鳥二羽が生む波紋交わる刹那に風が消し去る
ほどほどに距離保ちつつ小走りにハクセキレイは吾と小路へ
冬の雷遠のき幾すじ立ち上がる天使の梯子を乱す椋鳥
・鳥との楽しいひとときを詠んでいて心の温もりを感じる。

山はみどりに

岡野　甫江

佐保姫のうしろ姿も遠くなり花みな散りて山はみどりに
萌葱いろの葉むらの中の柿の花時間零るるごとく咲きつぐ
ひとつ落ちふたつ落ちして柿の花十を過ぎれば夏の近づく
砲煙の画像ゆるがすウクライナ満月くまなく射せる地球に
有事とはどういふ事かと日々に見て改憲論議またもり返す
トロイカも黒い瞳もカチューシャもロシア親しき青春ありき
海に向くカフェに憩へる人ら見ゆ外出自粛徐々にほどけて
親子らし自転車連ねてすれちがふ潮の香匂ふ五月の島道
さりげなく越えてゆかむと思ひしが八十歳（はちぢゆう）の峠少しざわつく
ときに寄するさざ波のやうな不具合にとまどひてゐる窓の守宮と
花みかんちからのかぎり夜もにほふこの世のかの世と妣に会ひたし

近詠十五首

歌会で袋いつぱい蚕豆（そらまめ）を義清さんからもらひて帰る

夕べには緑つやめくふくらみを愛でつつ蚕豆剥きてをります

蚕豆は緑ゆたかに茹であがりまことに青き味のするなり

降る雨の音を聞きつつ籠りゐる雨もまた良しみどり目に沁む

ひと言随想

五月の島に

満開の桜が散ったあと、枝々に萌え出た黄緑色の若葉も五月になると、その色を深め空を覆ふほどに広がっています。

また、この頃柿の木は、萌葱色の葉の間にびっしりと花を咲かせやがて実となります。

こんなさわやかで生気に満ちた五月の島ですが、ロシアの侵攻は止みません。

かつてロシア民謡に親しんだ世代である私は、日々の映像を複雑な思いで見ています。

一方、コロナ禍の収まることのない世の中は自粛もゆるみ、徐々に人の動きも活発になってきました。がしかし個人的にはまだまだ旅行への意欲はわきません。

これは、今年太台に乗った歳のせい（？）などと自問しています。そんな中うれしいこともありました。それは、義清さんが手塩にかけて育てた蚕豆を五月の歌会でいただき、味も香りも満喫できたことです。

村野次郎への旅（148）

大正期の「香蘭」（九）

千々和　久幸

前号に引き続き「香蘭」第四巻第四號（大正十五年四月）を読んでいこう。この號の「前月號短評」には珍しく古泉千樫が筆を執っている。

・冬青の木にいささかたまる夕ほこりひとり歸りて何かさみしき　　村野次郎氏

・車馬の往き來すでに稀なる道の草のほこりかぶりて夕ぐれにけり

静かな寂しい心持は出て居る。心を沈めて表現しようとする作者の近頃の傾向を自分は注意して居るのであるが、少し気魄が足らぬかと思はれるものがある。これらの歌もさういふ憾みがある。創作する時の作者の精神が十分に充ちて居れば、どんな静かな寂しい心持を歌つても、そこに力があり、或明るさが出て來るものだと思ふ。「冬青の木に」の歌、いささか、ひとり、何かさみしき、などの所に一層の工夫を要するものがあるやうである。次の歌も、「車馬の往き來すでに稀なる道の草の」は、やや説明的で調べにひびきが足らない。さうしてあの新宿邊から郊外へ出て行く街道の感じが十分出て居ないと思ふ。ほんの少しの所である。どうしたらよくなるかは今自分にも勿論分らない。作者の歌に期待する爲めに、自分の歌に對する考へを述べたのである。

・寒の水昨夜引きにけむ小田のあたりしのめ早くかぎろひて見ゆ　　深野庫之介氏

寒中に於ける暖かみが感じられて佳い歌である。ただ「しののめ早く」は少し時刻が早すぎはしまいか。ここはもつと單に「朝」といふ感じが出る表はし方の方がよいと思ふ。

・山裾の田水みなぎり春あさし明るき木々の影うつりつつ　　石野正太郎氏

「みなぎり」は強すぎていけない。「みなぎる」は水の勢が盛であふるるばかりのさまをいふ言葉であると思ふ。それゆゑ「明るき木々の影うつり」に調和しないのである。結句「つつ」もどうであらうか。第三句「春淺し」と切り、結句「つつ」としたあたり、一首の調を少し輕くして居る。次の歌「山裾の日ざしぬくとき庭がまへ七面鳥の遊び居るかも」は、大まかに單純に表はれて居てよい。

・あれいまだ老いしちちははに報いざり心にもちて日はすぎにけり　　冬野木枯氏

この「心にもちて」はきいて居ない。「ちちははを心に持ちて」といふやうに用ゐたい言葉である。狭野茅上娘子の「足引の山路越えむとする君を心に持ちて安けくもなし」の用法を翫味して活用すべきである。「日はすぎにけり」も適切にひびかない。

次の「家のもの養ふ責をわれはもてり稼ぐことおろそかになし得ざりけり」の方が素朴に歌つてあってよい。

古泉千樫の批評は遠慮がなく、またなかなかに含蓄があって読ませる。白秋の存在があったとはいえ、随時他結社からの有力歌人の評をも取り入れようとしているところに、若い「香蘭」の情熱を感ずる。

次いで「前月歌壇合評」も覗いておこう。評者は橋本敏夫、矢代東村、杉浦翠子、村野次郎である。

・この町に海軍飛行隊あり機の音を中空にきき朝あさ目ざむる（覇王樹）橋田東聲

（敏夫）俗に「一つ釜の飯を食つた」と云ふ言葉が有るが今に至つて橋田氏の歌をあげつらう事はいささか面映ゆい。之歌では作者は飛行機の音を聞いて目をさましたのではない。作者は「この町に海軍飛行隊」のあるのを既に承知してゐた。そして毎朝、飛行機の音をきいて目をさました。それを更らに思ひめぐらせば、飛行機の音は中空でしてゐたのであつた。作者は作者の頭の中にあるさう云ふ概念の悉くを綜合して此の一首を作り上げたのである。故に之は概念である。「機の音を」などと云ふ手際は氏の担ヤマ場だ。然し初句が詰つてゐるのに間延びのした末句は全體の調子をまるで傷つけてしまつた。

（東村）面白い歌の如くにして、實は面白からず何所か駄目な所ある故なるべし。

（翠子）海軍飛行隊だの機の音だの、中空だのと入れたのに割合に耳障りにならない、表現法はやはり作者の老練して居る結果でせう。かう云ふことをお歌ひになろうとするならば、これ以上には一寸出られないことでせう。作者のお心持通りに歌へた御歌と存じあげます。

（次郎）理屈を云ふと敏夫氏の様にも取れるが其程でもあるまい。翠子氏のこれ以上一寸歌へない程の秀歌では勿論ないが。

・遠くより笛ふく如き音たてて吾妻颪は雪をもち來る（アララギ）　結城哀草果

（敏夫）どうも私には感心出來ない。「遠くより笛吹く如き」何と云ふ卑俗な譬喩であらう。譬喩必ずしも非藝術として生きる爲には作者の完全に純朴な精神力に俟たねばならない。譬喩に於ては、表面に抽かれたる表象が愈少なければ其内に隠されたる主たる内容は愈大に、同時に藝術價値も益増大する筈である。其處に譬喩の効、譬喩の價値が有るのである。之歌の様に悪く理知的なのは不可である。「雪を持ち來る」も甘すぎやう。

（東村）寧ろ稚氣と飄逸とを愛すべし。されど感心出來る歌にはあらず。

（翠子）「吾妻颪は雪を持ち來る」は大層巧いと思ひました。然し、「笛ふくごとき」はどう云ふのですか。私にはあのヒューヒューと云ふ、風の鳴るを、かうたとへられたりすると、「笛ふく如き」の比喩がいかにも童話めいて聞えます。私が斎藤先生に教へられた頃、先生が「比喩のうまさは何でもない」と教へられたが、私は、今日までそれを墨守して居りますが、私の融通の利かない一徹は反つてその比喩の境地を知らずに終るかも知れません。氏は先生の門人故殊にこんな感想が私に浮びました。

（次郎）長塚節の豆を煎る如き小雀の　ほほづきをならすごとき蛙のこゑ、等の比喩に對しても相當の距離があると思ふ。

この合評は四人の評者それぞれの個性、持ち味の違うところが面白い。歌壇の先達の言葉なども引き議論が盛り上がっている様子が窺える。もっと読みたいのだが、紙幅の都合で此下は割愛せざるを得ない。

後記に（次郎記）としてこうある。「北原先生に同人の選をお願した今度は皆努力した爲め相當に採られた歌が多かった。本號には古泉氏の批評を頂戴することが出来た。めつたに此方面に筆を取られない氏のこととて誠に有難い。各作者は今一度自己の作を顧る必要がある」